

## 〈随想〉魯迅のこと

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

112

(終了ページ / End Page)

113

(発行年 / Year)

1987-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019540>

## 魯迅のことと

立石 伯

一枚の写真から暫く眼が離せなかった。この写真は広州魯迅紀念館の展示品のうち貴重な資料ではない。一九八一年に開かれた「魯迅誕生一百周年紀念大会」の会場を写した白黒写真にすぎない。八年はドストエフスキイ死後百年、魯迅生誕百年であった。その頃これに関して論じた事があり、「魯迅が批判した周揚の紀念大会での演説もあるようで、文化大革命後の魯迅評価の機微を注目したいと思う」とも書いた。党主席就任まもない胡耀邦が魯迅の革命精神とその遺作が死後一層尊重される由の挨拶をし、周揚が魯迅は偉大な文学者・思想家であるばかりでなく偉大な革命家であった、という趣旨の報告をしたはずだが、その詳細は知らないままに過ぎた。魯迅は彼の忌み嫌った正人君子にまつりあげられつづけたはずなのである。胡耀邦、周揚の名が写真説明にもみられる。

ある人と魯迅について語る機会があった。彼は魯迅研究が文革後も活発であつて、その中でも王當仁や劉再復の研究が出色であると彼の判断を語った。いわば、中国の封建思想に反対する鏡としての

魯迅、中国文化・民族についての高度な認識や彼の創作心理のありよう等が多角的に論じられているからだという。当代性や現実性、創作心理・技法や文化の側面から新しい魯迅像が刻みつけられるのはいい事だ。王當仁の名前は初めて知ったが、劉再復は文学の主体性について論じたり、性格組合せ論の筆者であることは既知に属した。その折、作家であり、西欧的文学方法論の研究者である高行健について尋ねてみたが答は得られなかった。最初に喋りたくなかったり、触れるべきでないと思う事は無視して貰つて結構だと断わつておいた為である。とはいえ、簡単にいえば、私は劉再復や高行健が、その主体性論や西欧的文学方法論の下で魯迅を論じた時、どのような魯迅論が書かれるか知りたかつたからである。

また以前からの魯迅評価軸の一端——『阿Q正伝』を論じた場合に阿Qは階級の典型か、民族の典型か、あるいは阿Qは死んだか、生き残っているか——が文革後どのように深められつつ新しい民衆像を提出しているか、さらに八一年の胡耀邦と周揚の報告の詳細も

知りたかった。勿論他に多く語りつつ尋ねたが、はかばかしい答がかえってこなかった。しかし、仕方あるまい。今年初めに劉賓雁、王若望等が中国共産党を除名され、胡耀邦が総書記を辞任し、私の訪中前の八月中頃、吳祖光、于浩成、李洪林等の劇作家や文芸評論家六名ほどが党を除名されるらしいとのニュースが報道されたりした。数年前の白樺の自己批判、ブルジョア自由主義精神汚染の除去キャンペーン、女流作家の遇羅錦の西独亡命など難しい問題を抱えている中国文芸・文化界の状況ゆえである。

私一個の希望としては『呐喊』『彷徨』『野草』等の小説や詩が文学の本質的な位相で批評、研究されるのを願うのみである。この願望はここ当分の間、空しいものかもしれぬ。というのも、上海虹口公園の魯迅の大きな座像と墓に直面してみると、魯迅を語る場合どうしても「偉大」という修飾がつきまといそうだな、と邪推されるからにはかならない。あの墓は壮大で立派すぎる。同じ公園内の上海魯迅紀念館に移して展示されている万国公墓内の最初の墓、すくなくとも戦中にこの墓が破壊されたため修築された第二の墓石碑の大きさを十分なような気がする。墓としても好ましい。ところで文革開始後、この墓が破壊されたのは何を意味するか。ともあれ、因果な事に私は全国各地に建立されているこれまた巨大な毛沢東の立像を連想してしまふからである。何であれ、偶像化、神格化する精神のありようは否定されねばならぬだろう。

魯迅崇拜を揶揄するつもりはないし、話が深刻、痛烈な事に及びそうなので、紹興訪問の折の一場のみを記しておきたい。既に知る人もあろうが、紹興魯迅紀念館、故居からそう離れていない処に咸

亨酒店が再建されている。「孔乙己」に描かれた酒場である。作品ではこの酒屋は鎮のはずれにあつたらしいし、金のない孔乙己や労働者たちの立飲みする曲尺型の大きなカウンターなど今使われていないから、作品の描写と重ねる必要はない。ただ、中国の現在はいくような酒場を再建したと知ればよい。気楽な旅行者の通弊で、特に私のような酒好きは、波打った今にも崩れそうな屋根の薄暗く汚い店内に入って飲みたくなる。女性通訳が、本当に入って飲むんですか、私はむこうで待っていますから、とあきれ顔で問い質したのも宜なるかなである。ただし、彼女は酒店前の屋台で揚出し豆腐の串刺をつまみに買って呉れたので、余りつまみを食わぬ故に例の茴香豆を試食する機会を失ってしまった。

一元いくらかを出して大きな白碗になみ／＼注がれた老酒をカウンターで貰う。瓶半分の量らしい。その柱には「太白遺風」の大看板がつるされている。私は中国のある人たちから「酒仙」というアリガタイ称をもらったので、斗酒を辞せずここで月を抱いて死んでみせる芸でも披露しなければならぬか。そうはいかない。つまり、一人の汚い身なりの男、魯迅ならば「乞食」と書くだろう男が客の皆から嫌われるのを厭わず店を徘徊していたのに付合うわけにはまいらぬ。この男、孔乙己の如く笑ひ者にされなかったが、遂に誰からも相手にされぬのが解ると喚き罵りながら出て行った。彼が現代の孔乙己だと錯覚するほど感傷的ではない。けれども、現代的な貧困、階層性、民衆心理、知識人、文学者のあり方等について老酒をゆったり味わいつつ考える時間的・精神的余裕がなかったのは返す返すも残念至極な事であった。

(文学部教授)